

コラム57： 軀の店 （2017年4月）

「ママ！コレって何という魚？」

前に出された1300円の刺し身定食を見て、私は思わず聞きました。

「ソリゃあ、デビラとサヨリとタイじゃがな」

カウンターの向こうにいるママが、即座に答えます。

「タイはわかるが、デビラやサヨリの刺し身は、あんまり見んよねえ」

「コマイけえね、メンドクサイけえ、皆やらのんよ。ほいじゃが、軀の港で揚がるんは、ソガイナ魚ばっかしよねえ」

「ここへ来んと、こういうのは食べれんいうことじゃねえ」

旅の楽しみは、地元の美味しいモノを食べることと、土地の人と触れ合うこと。私は妙に幸福な気持ちになって、小皿に盛られた刺し身に箸をつけるのです。



今年の4月14日の夜7時頃。福山・軀の浦の太田家住宅で雛人形の片付けをした後の、すぐ近くにある「おてび」という店での話です。ここは昼間は定食屋で、夜は居酒屋という感じの店。それで私はこの店を経営している、私と同年輩(?)とおぼしき女性を、以前から「ママ」と呼んでいます。私がカミサンの雛飾りを手伝うのは、この店で「一杯飲む」という楽しみがあるからなのです。15年前に、この地での雛飾りを始めた以来の、「お馴染みさん」ですから、期間的には長いお付き合いになります。ただし、一年に何度かしか来ない「儲からないお客」ではあるんですがね。



刺し身定食を「ツマミ」にして、ビールを飲み干した私は、少しいい気分になって、カウンターの前に声をかけます。

「ママ、イモ焼酎のお湯割りね」

そして、席を立ちあがり、カウンターの上に並んでいる大皿の中を物色。そこに有るのは、「イカ」と「タコ」さらには「寒ブリ」や「シタビラメ」と、いろんな魚の卵など、軀の浦の港で揚がった、いろんな小魚の煮物や揚げ物の類がズラリ。なんかどれも美味そうで、迷うんですよ。又しても私はママに質問します。



「この小さい魚は何ね？」

「こりゃハゼで、こっちはコチじゃな。骨が多いんで、毛抜きで抜かんンといけんけえ、手間なんよね」

私はどれにしようかと迷ったあげく、結局は

「ママ、これらを適当に少しずつ混ぜて、一皿くれる？」

要するに、全部少しずつ味わってみるということになるんですな。

この店は私のコラムの中で、文や写真で幾度も登場しています。ガラスの格子戸を引いて店内に入ると、左にテーブル席が二つ、右がL字のカウンター席になっており、その向こうは厨房になっています。14-5人入れば満席という感じの小さな店ですね。あまり目立ちませんが、この店の奥側には、「隠れ部屋」のごとき座敷があるんですよ。ここは人数の多い団体さんが来たときだけ使用しているのですが、有名人などが大勢で来店の際は、当然ながらこの部屋が使われるのです。私も何度かここで食事をしたことがあります。10人程度なら十分に入れますし、外からは全く見えませんから、チョツとした宴会にはいい感じの部屋なんですよ。



店に入って最初に目に入るのは、左の壁に所狭しといっぱいに張られている写真ですね。最近のものもありますが、かなり昔の人が多いようです。「松平健」「北王寺欣也」といった大御所から、「中村敦夫」「藤竜也」のような個性派まで、かなり豪華な顔ぶれですね。皆さん、一杯飲んで出来上がっている、といった雰囲気です。「隠れ部屋」だからこそ、心置きなく楽しめるのでしょうね。「欣也さん」のこんな表情は珍しいのではないですか。

どうしてこれだけの俳優さんが、こんな店に(失礼！)と最初は思い、ママに聞きましたよ。この鞆の浦は、時代劇などの撮影所のある「みろくの里」に近いのです。それに加えて、そこでの撮影所のスタッフがママの知り合いらしいのです。これで納得しましたね。

いつものように飲みながら、壁に貼ってある写真を見ていると、どこか見覚えのある若い俳優さんに目が留まりました。「コレって、渡辺謙じゃないの！若いなあ！」どうして今まで気が付かなかったんですかね。いつ頃の写真でしょうか。右下に「御家人斬九郎」と書いてありますから、TVドラマにでも出演していたんですかね。

「ママ、これはいつ頃の写真？」

「だいぶ前じゃけど、よう覚えとらんのかね。10年位前かねえ」

「いやいや、そりゃあないんじゃないの。どう見ても20年は経つと思うよ」

「謙さん」の隣にいるママも、えらい若い感じですよんね。



彼はデビュー間もない頃に、白血病を患っていたことがありますから、もしかしたらその頃の写真ではないでしょうか。心なしか、彼の表情がいま一つ冴えない感じに見えるのです。その後、ガンを克服した彼は、めざましい飛躍をみせ、今や日本の誇る代表的な「国際俳優」として活躍していることは、万人周知の事実ですね。50代にして、ブロードウェイのミュージカルにも挑戦し、成功を収めているのだから、スゴイことです。最近では週刊誌での「不倫報道」で話題になりましたが、こんなツマランことで、ダメになるような俳優ではないと思います。まだまだこれから、俳優として「いい仕事」をしてほしいものです。

この店で出会った＜有名人＞として印象に残っているのは、「火野正平さん」ですね。彼については、＜おっさんのつぶやき 会社編＞の＜その31 もてる男＞(’08・5)で、「ツルツル頭の中年男 H・S」としてコラムに登場しています。彼に出会ったのは、その前年の春ですから、もう10年前の話になりますかね。＜昔話＞の領域になるので記憶も薄らいでいますが、今回はもう一度その時のことを、再現してみましようか。

写真の中の記録によれば、日付は2007年の3月31日とあります。時間は不明ですが、私たちがその日の人形の片付けの作業を終えてから食事に行った時間ですから、土曜日の夜の8時頃だと思いますね。店にいるのは、入り口から向かって左のテーブル席に妻と私、そして入って右手のカウンター席に「正平さん」と彼の連れらしき「妙齢の女性」、そしてもう一人カウンターの奥側に、「中年の男性」がいたのです。店に入ってからすぐに、カミサンは彼が「火野正平」だということに気づいたのですが、隣の女性と話していたので、私達も二人だけで話をしていました。

その女性が席を立っていなくなり、最初に話しかけたのは、カウンター席に座っていた、地元の人らしき「中年男性」でした。ペラペラとツマランことを聞いていましたよ。

「正平さんは、オンナにモテるらしいですね」

「いやいや、そんなことはないですよ」

「テレビの＜田舎に泊まろう＞という番組があるでしょ。あれに出てくださいよ」

「僕はタレントではなく、＜役者＞ですから、そういうのには出ませんね」

そんな内容だったと思いますが、自分自身を＜役者です＞という言い方には、長く芸能界で生きてきた、彼のポリシー（信念）のようなものを感じましたね。

私と彼との会話が合ったのは、その「中年男」が帰った後でした。私はテーブル席の入り口側に座っており、右手のカウンター席に座っている彼とは、2m位しか離れていないので、話しやすい位置にいたのですよ。

「こちらには、撮影で来られたんですか？」

「京都での仕事が早く終わってね。ママの顔を見に寄ってみたんですよ。イヌといっしょにね」

あとで外に出たら、店の駐車場に彼が連れてきた二匹の犬がいたんですよ。一匹は柴犬のような小型犬でしたが、もう一匹はモノスゴク大きな、毛の長い黒犬。暗闇の中で目だけが光っていましたね。彼はイヌを連れて車で移動しているんでしょうかね。



私はその当時57歳。そろそろ定年後のことを考えなくてはならない時期でした。それで、なんとなくこんな話から始まったと思います。

「俳優さんはいいですね。定年がなくて一生やれますから」

「いやいや、役者も年をとるといろいろ大変なんですよ」

「僕は24年生まれの団塊世代なんですが、正平サンは何年生まれです？」

「僕も24年なんですよ」

何と同級生でしたか！ なにかその時、急に親近感を覚えましたね。

そして、彼は唐突にこんなことを言い出したのです。

「女性は少し太っている方がいいですね。痩せていると苦勞をかけてるみたいで」

「……そうですね??？」

私は一瞬、その意味がわかりませんでしたね。

私は少し考えてから、この言葉の意味を理解しました。彼は隣の女性と話しつつ、私とカミサンの話を、それとなく聞いていたことになるんですよ。店に入って間もない頃に、いつものごとく「食欲旺盛」なカミサンに、「そんなにエツと食べるから太るんよ！」と言ったのですね。自分では大きな声で言ったつもりはないのですが、なにせ小さな店の中ですから、彼の耳にも入ったのでしょう。そこで彼は、ウチのカミサンをくそんなに太ってないですよ>とフォローする意味で、この「台詞」を言ったんだと思うのです。モノスゴイ「気配り」だと思いませんか？彼が芸能界の「モテ男」である理由の、一端を見たような気がしましたね。

10年前に、「僕は<タレント>ではなく<役者>です」と言っていた彼も、現在はNHKのBSの「ひとり旅」という番組に毎朝出演していますね。彼が自転車に乗って日本全国を旅をし、視聴者から投稿された「思い出の風景」を探して歩く、という構成の長寿番組です。NHKの看板番組「朝の連ドラ」の後にあるので、いつも流れで見えていますね。彼の気取らない自然体のキャラクターが生かされている感じで、地味だけどオモシロイ番組です。もう一度会う機会があれば、<役者>よりも、<タレント>活動に力を入れているかのように見える、彼の「心境の変化」について聞いてみたいものですね。彼には、<役者>として<いい仕事>をしてほしいですね。たまたま居酒屋で言葉を交わした「同級生」として応援してますよ。それだけの才覚と個性をもった人だと思うのです。

おもしろいのは、番組の中での、出会った女性に対する彼の態度ですね。若くてチョッとカワイイ女性を見るとスグに声をかけるんですよ。彼と同年輩のオバサンの場合には、向こうから言い寄って握手を求められことが多いんですよ。どちらの場合でも、彼の本姓そのままに、「自然体」でやっている感じなんですね。私なんかには、絶対に真似ができないことですね。彼は「女遊び」の好きなプレイボーイというタイプではなく、本当の意味での「女好き」なんでしょうね。女性を積極的に口説くというより、じっと女性の悩みを聞いてくれるというタイプの「モテ男」なんでしょう。

さっきから、隣の席のカミサンが、小声で耳打ちをするんですよ。

「ねえねえ、いっしょに写真撮れないかねえ」

<どうしてワシが、そんなこと頼まんどいけんのかい！>

そう思いましたが、どうも柄にもなく恥ずかしがっているようなのですな。

「すみません！妻がファンなんで、いっしょに写真いいですか？」

「いいですよ！」

というわけで、出会いの記念のツーショットが実現できたわけです。今見ると、10年前だけに「正平ちゃん」もカミサンも若いです。私はあの頃は、けっこう太っていたみたいですね。この頃の「正平さん」は、今のようにヘッドタオルのごとき布を頭に被っておらず、ツルツルのスキンヘッドだったんですね。初対面で妙に親近感を覚えたのは、頭髪の形状が似た「ハゲ同志」のせいかもしれませんな。

「酒場という聖地へ 酒を求め 肴を求めさまよう…」

「酒場放浪記」

この店の二つあるテーブル席の入り口側、その道路側の席を、私は勝手に自分の「指定席」に決めています。だから、空いていれば必ずそこに座りますね。私はこの店に年に何度かしか来ないのですが、なぜかその位置が一番落ち着ける場所なんですよ。以前に、「酒場放浪記」(コラム32)で、学生時代からの馴染みの居酒屋「金ちゃん」について書きましたが、私は高級店やチェーン店は好まないんです。安くて美味しいツマミがあって、頑固なオヤジとか、人の好いママがいて、という感じの何処にでもある小さな居酒屋が好みなんです。意外とそんな店は見つからないですね。ちょっと「小汚い」(こぎたない)感じの雰囲気のお店でないと落ち着かないのですから、困ったもんですよ。

「居酒屋の楽しみ」を覚えたのは、酒の味を覚えた学生の頃からですから、もう50年近くも飲んでいることになりますね。若い頃からの友人や、職場の上司や同僚などのいろんな仲間たちと、ずいぶんと色々な話をしてきたと思うのですが、今となっては何にも思い出しません。しかし、今になって言えることは、居酒屋での語らいのひと時は、自分にとっては「人生の至福」の時であったと思うのです。この店でも、ずいぶんいろんな人が酒を飲み、語り合ったのでしょう……

「いっしょに酒を飲む相手というのは、＜正平ちゃん＞は女性が似合うじゃろうが、ワシは苦手じゃなあ。気の合う男同志で飲む方がよっぽどエエわい。」

(余談1)その翌日の事。「せっかく桜が綺麗なんじゃけえ、見んと損よ」などと、カミサンがいうものですから、朝早く起きて、近くの山に行って見ましたよ。鞆の港を見下ろす高台にある「医王寺」という寺ですね。以前に一度、この時期に行ったことがあります。その時の桜はかなり散っていて、半分は葉桜状態でしたが、今年はほとんど散らずに満開のまま。私達以外に誰も居ず、もったいない感じでしたよ。

とその時、桜花爛漫の何処からか綺麗な音色が…… ♪～ホーホキエキョ～♪
「ウグイスじゃね」「ウグイスって、こんなにいい声なんだ」 気持ちよさそうな鳴き声でした。澄んだ空気の、景色のいい場所では、小鳥もこんなにキレイな声で鳴くのかと思いましたね。あとで気づいたことですが、その日、4月15日は、私たちの38年目の結婚記念日でしたな。

鳥たちも 桜の散るのを 惜しむよう

